流通科学大学　高等教育推進センター紀要　第７号，31-41（2022）

観光におけるやさしい日本語

Easy Japanese in Tourism

福岡寿美子*
Sumiko Fukuoka

オムニバス形式による観光学へのいざないの科目において、日本語教育の立場から、何を教授することができるのか、また、何を教授すべきなのかについて考え、実際の授業の組み立てを行い、授業を試み、これらの試みを通して、観光におけるやさしい日本語について考察する。

キーワード：日本語教育、やさしい日本語、観光、観光学へのいざない、授業の試み

Ⅰ．はじめに

１．やさしい日本語の誕生

1995 年１月 17 日に発生した阪神・淡路大震災は、死者 6,000 人以上、負傷者 40,000 人以上の大災害で、多数の被災者を出し、外国人も数多く被災した。

その際、日本語と英語以外では情報が発信されなかったため、これらの言語が不自由な外国人は、震災による家屋被害で、家が住めなくなった上に、復旧過程において、必要な情報を十分手に入れられず、二重に被災した。

こうした状況を見た社会言語学者や NHK のアナウンサーらが協働して、緊急時に必要な情報を簡単な日本語で提供する方策を研究した。これが専門用語として「やさしい日本語」が用いられた最初である[1)]。

２．やさしい日本語の誕生に関する先行研究

松田・前田・佐藤[2)]によると、以下の A は、阪神・淡路大震災の当日、朝７時の NHK ニュースで放送された文である。B は、非日本語話者にも理解しやすい表現に言い改めた文である。

A を B に書き換えたところ、外国人の理解度が約 30%から約 90%に上がったという。

A　原文

けさ５時 46 分ごろ、兵庫県の淡路島付近を震源とするマグニチュード 7.2 の直下型の大きな地震があり、神戸と洲本で震度６を記録するなど、近畿地方を中心に広い範囲で、強い

* 流通科学大学人間社会学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

（2021 年 12 月 9 日受理）
©2022 Center for Promotion of Higher Education

揺れに見舞われました。

B　言い換え文

今日、朝、５時 46 分ごろ、兵庫、大阪、などで、とても大きい、強い地震がありました。地震の中心は、兵庫県の淡路島の近くです。地震の強さは、神戸市、洲本市で、震度が６でした。

松田・前田・佐藤[2)] 等によると、A を B に言い換えたのは、以下の理由による。

「けさ」という語は難易度が高いので、「今日、朝」とした。また、庵[1)] は、「けさ」と言ってしまうと、「けさ」という語を知らないとわからなくなるが、「今日、朝」と言い換えると、既知のことばの組み合わせで理解できるという。

A は、「地震が」という主語の前に「兵庫県の淡路島付近を震源とする」「 マグニチュード 7.2 の直下型の大きな」の２つの長い修飾部があり、複雑な文の構造となっているので、B では、「大きい、強い地震があった」という情報を先に伝え、その後で、必要な情報を付け加え、簡潔に伝えられる構文にしたという。

また、庵[1)] は、長い表現があった場合、日本人は背景知識があるため、その部分は重要ではないと思って聞き流せるが、日本語がよくわからない外国人は、何か言っているから、それを全部聞かないといけないと思って全体を聞こうとし、その結果、余計に全体で何を言っているのかがわからなくなるという。

「震源」「付近」は、それぞれ「地震の中心」「近く」という、わかりやすい表現に言い換え、「マグニチュード」「直下型」という語は、理解されにくく、情報としての緊急度も低いので省略し、「地震があり」という連用中止で、次の文に続けず、「地震がありました」と、文を終了させたとある。

「震度６を記録する」は、「震度が６でした」と簡単に表現し、「震度」という語も理解されない可能性は高いが、この語は繰り返し使われ、その後の地震の状況を知るうえで、重要な語なので、そのまま使い、この語のわかりにくさを補う意味で「地震の強さは」という一文を付け加え、全体の意味を通じやすくした。このような使い方をすることで、日本語に不慣れな外国人でも、何度か聞いているうちに、しだいに理解できるようになると考えたという。

「記録するなど」のように、「～など」を使って文を続けることを避け、「近畿地方を中心に広い範囲で」は、わかりやすくするために「近畿地方」という地域名ではなく、日常的に親しみのある県名を用い、場所の情報は重要なので、文の最初に用い、「揺れ」や「見舞われる」は、難解な語で、特に付加すべき情報ではないと判断し、省くことにしたとある。

上述のような形で表現の方法に注意し、さらに、読点の部分でポーズを取って読むことにも注意した結果、理解度が大幅に向上したということである[1)]。

３．研究目的

本研究では、オムニバス形式による[3]観光学へのいざないの科目において、日本語教育の立場から、何を教授することができるのか、また、何を教授すべきなのかについて考え、さらに実際の授業の組み立てを行い、授業を試みた。これらの試みを通して、観光におけるやさしい日本語について考察することを目的とする。

このようなやさしい日本語の誕生、やさしい日本語の誕生に関する先行研究、研究目的を基に、次章では、やさしい日本語について述べる。

Ⅱ．やさしい日本語

１．やさしい日本語とは

やさしい日本語とは、上述の阪神・淡路大震災の例からも明らかなように、災害が起こった時、定住外国人の母語はさまざまなので、直ぐに多言語に翻訳するのは困難であるため、日本語において、簡易な表現を用いたり、文法や文の構造を簡単にしたり、また、漢字にふりがなを振ったりして、日本語に不慣れな外国人にもわかりやすくした日本語のことである。これは、減災のためのやさしい日本語である[4]。

そして、庵[1]は、災害時にやさしい日本語で情報を提供することは重要であるが、人間の生活の大部分が平時であり、平時における情報提供についても考える必要があるとして、（１）初期日本語教育の公的保障の対象としてのやさしい日本語、（２）地域社会の共通言語としてのやさしい日本語、（３）地域型初級としてのやさしい日本語、の３つのやさしい日本語を提唱している。

現在日本には、約 282 万人の在留外国人がいる[5]が、2008 年に国立国語研究所が行った「生活のための日本語：全国調査」の結果によると、英語ができると答えた人は 44.0%であるのに対して、日本語ができると答えた人は 62.6%もいた。岩田[6]は、日本語による情報伝達の重要性について述べ、やさしい日本語を積極的に用いるべきであると主張している。

２．やさしい日本語を話すコツ

荒川[7]によると、やさしい日本語を話すためのコツは、はっきり、さいごまで、みじかい文で話すことで、これは頭文字を取って、「ハサミの法則」と呼ばれている。

a. 何を話すか

やさしい日本語で何を話すかについて考える際、まずは、やさしい単語、つまり、外国人が知っている語、学習の初期に習う語、よく使う語を選び、そして、和語、つまり、もとから日本語にあることば、漢字で書くと訓読みをすることば、「宿泊する」より「泊まる」、「店舗」より「店」を選び、和語であっても、敬語は避け、「おいでになる」より「来る」、「召し上がる」よ

り「食べる」を選び、わかりやすい日本語を目指す[7)]。初級日本語学習者は、接客業やサービス業で話す場合の基本である「です／ます」の丁寧形から学ぶので、「来ます」「食べます」の方が、より通じる。

b. どう話すか――ハサミの法則

「ハ」は、はっきり話すという意味で、①口を大きく開けて、音のひとつひとつを明瞭に発音する、②「を」「に」「から」などの助詞を省略せずに言う、③あいまいな言い方をせず、はい・いいえをはっきりさせる。「サ」は、最後まで言う。「ミ」は、短く伝えるで、一つの文の中に言うべき内容をいくつも入れるのではなく、内容を少なくして、たくさんの文を作る[7)]。これは日本語教育の初級の授業で、複雑な内容の話をする際に用いられる方法である。

つまり、和語を選び、「です／ます」の形を使って、はっきり、最後まで、短く言えば相手に通じるやさしい日本語になるという。

c. ３つの「～ない」

やさしい日本語には、外国人の話す日本語に対して、①怒らない、②ほめない、③直さない、の３つのテクニックが必要で、日本語が通じなくても怒らず、カタコトの日本語を子ども扱いして過度にほめず、多少の間違いがあっても直さず、外国人の日本語を誠実に聞き、相手がわかるレベルの単語を使って、「ハ・サ・ミ」を実践すれば、英語や中国語ができなくても、国際コミュニケーターになれるという[7)]。

３．やさしい日本語の補助ツール

やさしい日本語の補助ツールとして、（１）身振り手振り、（２）筆記用具があり、身振り手振りは、文化圏によって多少の差はあるが、ほとんどの場合は、その場の状況や表情から誤解は避けられ、また、筆記用具は、非漢字圏や漢字圏の外国人に、それぞれアルファベットや漢字等を使って書き、これら２つの補助ツールを使うことによって、やさしい日本語を補完することができる[7)]。

やさしい日本語のやさしいには、易しいと優しいの２つの意味が含まれていると考えられる。本研究では、これらのやさしい日本語の考え方を基に、観光におけるやさしい日本語について考察する。

このようなやさしい日本語とは、やさしい日本語を話すコツ、やさしい日本語の補助ツールを基に、次章では、観光におけるやさしい日本語について述べる。

Ⅲ．観光におけるやさしい日本語

１．観光現場で日本語を使う意味

観光現場で日本語を使う意味は、日本人側からすると、外国人旅行者に話しかける心の壁を低

くすることができ、外国人旅行者側からすると、日本語を勉強してきた人にとっては、自分の日本語を試すいい機会であり、日本人とのコミュニケーションを期待している可能性が高く、本場日本での日本語コミュニケーションは旅のいい思い出にもなるという[8)]。国際交流基金の 2018 年度の調査によると、海外での日本語学習者数は、約 385 万人である[9)]。他にもアニメ等で自学している人も多くいる。われわれ日本人が、英語等の外国語を勉強し、米国を初め、ヨーロッパ等の国々に旅行し、自分の英語等の外国語がどれくらい通じるかを試してみたくなる感覚と同様ではないかと考えられる。

２．外国人旅行者のためのやさしい日本語環境

加藤[8)] は、外国人旅行者のためのやさしい日本語環境は、やさしい日本語（ことばの側面）、やさしい日本語（使い方の側面）、文化的配慮、外国人旅行者と接触するときの日本人の意識から成り立っているという。

やさしい日本語（ことばの側面）とは、やさしい日本語を使って外国人旅行者とコミュニケーションをする場合、ゆっくりと明確に話したり、使用する語彙を初級レベルにしたり、複文ではなく単文を使用したり、英語話者が戸惑うようなカタカナ語を避けたり等のことばの形式的な側面である。やさしい日本語（使い方の側面）とは、外国人旅行者とはどんな人なのか、外国人旅行者とのコミュニケーションをどう点火させるのか、その時どんな言語を選び、どんな話題で話すのか等、やさしい日本語を社会や文化、その場の文脈との関わりのなかでどう使っていくかに関わる側面である。文化的配慮とは、外国人旅行者が旅館に泊まる場合、布団の敷き方や温泉の入り方などの伝統的スタイルを、どの程度調整する必要があるのか、Wi-Fi 環境をどうするのか等、外国人旅行者が日本でコミュニケーションをするときの文化的な側面である[8)]。

つまり、外国人旅行者のためのやさしい日本語環境は、やさしい日本語におけることばの側面や使い方の側面、文化的配慮だけではなく、外国人旅行者と接触するときの日本人の意識も重要であると言える。

このような観光現場で日本語を使う意味、外国人旅行者のためのやさしい日本語環境を基に、次章では、観光におけるやさしい日本語の使い方について述べる。

Ⅳ．観光におけるやさしい日本語の使い方

１．外国人旅行者とはどのような人たちか

2019 年の外国人旅行者数は、約 3,200 万人で、その国籍（一部地域を含む）は、1 位から 10 位は、中国、韓国、台湾、香港、米国、タイ、豪州、フィリピン、マレーシア、ベトナムである[10)]。一方、上述の通り、2018 年時点で海外には約 385 万人の日本語学習者がいる。これを国籍別にみると 1 位から 10 位は、中国、インドネシア、韓国、オーストラリア、タイ、ベトナム、台湾、米

国、フィリピン、マレーシアである。

これらから、日本に近く、馴染みのある国の人の方が、相対的に日本語を勉強していることが多く、日本旅行への関心が高いということが言える。日本語学習経験者であっても、一般的に学習歴は長くなく、初級程度の人が多いと考えられるので、そういう人たちにも理解されやすい日本語、つまり、やさしい日本語を用意しておく必要がある[11)]。

日常的に日本語に触れている約 282 万人の在留外国人も、旅行すれば、外国人旅行者になる。

2019 年の観光庁の調査では、個別手配で日本を訪れる人たちが、全体の 72.6%である[12)]。これらの個人客は、団体で来る人たちとは違って、普通の日本人の暮らしぶりや、日本人とのコミュニケーションに、より関心を示しやすく、日本語学習の経験がなくても、このような人たちにも、全部英語にしないで、文脈から理解できる場合は、日本語を使ってもいいという[11)]。

加藤[11)] は、外国人旅行者はどのような言語問題を感じているかを考えるため、独自の調査分析を行った結果、外国人旅行者は、英語ができない日本人に対してではなく、英語を恐れてコミュニケーションが始められない消極的な日本人に問題を感じていて、英語が完璧でなくても積極的に、フレンドリーに関わっていこうとする日本人を評価するとしている。

外国人旅行者のなかには、日本人と人間的な接触を望んでいて、使われる言語はいずれでもよく、必ずしも英語を使ってほしいと望んでいるわけではなく、本場の日本で日本語を使ってみたいという日本語学習者もいるので、外国人旅行者には日本語を使ってみる価値はあるという[11)]。

２．外国人旅行者と何を話すのか

加藤[11)] によると、外国人旅行者とのコミュニケーションの内容は、日本人旅行者とは異なっていたり、意外なものであったりする可能性が高く、長く経験を積めば、どのような話題が出てくるかがわかってくるが、「今・ここに」あるものを話題にし、実演したりして、コミュニケーションをすると、日本語がよくわからなくても、意図が伝わりやすくなる。

話題を先にコントロールしておくのもいい方法であり、話の内容を初めからコントロールしておけば、日本人側も必要となるやさしい日本語に使い慣れ、よりわかりやすい表現に洗練されてくるという[11)]。

３．コミュニケーションの点火

コミュニケーションの点火について考える。加藤[11)] によると、欧米系の立食パーティでは、コミュニケーションを積極的に点火させることがルールであり、観光立国実現を目指す現在の日本では、どうコミュニケーションを始めたらいいのか、まずは、「こんにちは」からコミュニケーションを点火させ、出だしの心の壁を取り除くこともやさしい日本語の機能である。

コミュニケーションを点火させるための環境作りも大切で、点火を容易にさせるためには、や

さしい日本語の他にも仕掛けがあると効果的であり、外国人旅行者は、日本人には何でもないものを不思議に思って写真を撮ることが多いので、カメラを指しながら、「写真を撮りましたか？何を撮りましたか？」などとやさしい日本語で聞いてみると、コミュニケーションが点火するという[11)]。

このような外国人旅行者とはどのような人たちか、外国人旅行者と何を話すのか、コミュニケーションの点火を基に、次章では、「観光学へのいざない」の授業におけるやさしい日本語について述べる。

Ⅴ.「観光学へのいざない」の授業におけるやさしい日本語

観光学、教養教育、英語教育等を各専門とする複数の教員によるオムニバス形式の「観光学へのいざない」の授業において、全15回の授業の１回担当（１コマ90分）という限られた中で、日本語教育の立場から、何を教授することができるのか、また、何を教授すべきなのかを考えた際、やさしい日本語の誕生の経緯、観光学科の日本人学生への日本語教育の視点からの教授、近刊書であること等の理由から、想定されるテキストとして、加藤好崇編著『「やさしい日本語」で観光客を迎えよう―インバウンドの新しい風―』（2019、大修館書店）を最適として選定し、本テキストの第Ⅰ部「やさしい日本語の作り方と使い方」を中心に、エッセンスをまとめて教授することを試みる。

１．授業の組み立て

授業の組み立てにおける、時間（分）、内容、章、節、項、PPT（パワーポイントのスライド）番号等について、以下の表１にまとめる。

表１　授業の組み立て

時間（90分）		内容、章、節、項	PPT番号
導入部 （30）		自己紹介[13)]	１～19
		アンケート： Q；やさしい日本語とは、どのような日本語か？　Q&A	20
		やさしい日本語の誕生	21～28
		本日のテーマ：やさしい日本語 内容； 観光におけるやさしい日本語とは何か、その作り方と使い方	29
		テキスト紹介	30
	展開１	１章やさしい日本語で話してみよう	31～33

展開部（50）	（10）	１．観光現場で日本語を使う意味	
		２．外国人旅行者のためのやさしい日本語環境	34～38
	展開２（30）	２章やさしい日本語って何だろう？ １．やさしい日本語を話すコツ （１）何を話すか	39～43
		（２）どう話すか――ハサミの法則	44～49
		（３）３つの「～ない」	50～58
		２．やさしい日本語の補助ツール	59～63
	展開３（10）	３章観光におけるやさしい日本語の使い方 １．外国人旅行者とはどんな人たちなのか	64～70
		２．外国人旅行者と何を話そうか	71～72
		３．コミュニケーションの点火	73～75
結論部（10）		総まとめ	76
		本日の課題：レスポン（respon）[14] による	77

授業の組み立ては、導入部、展開部、結論部の３部構成とし、展開部は、さらに３つに分け、本テキストの１章、２章、３章を、それぞれ展開１、展開２、展開３とし、展開２の２章を本授業の中心部、メインテーマとして、授業時間も１／３の 30 分を取り、詳しく説明をした。導入部での本授業のテーマへの動機づけとして行ったアンケートは、授業の展開１、２、３に進むにしたがって、その解を得て行き、確認し、最後に、結論部の本日の課題にて、解答を書き、提出して、完結するという仕組みづくりを行った。

２．授業の実際

a. クラスの概要

「教養特講Ⅰ（観光学へのいざない）」の本授業の実施時期は 2021 年６月、受講者は、観光学科の１年生 70 名である。本授業は、対面クラス（60 名；日本人学生 43 名・留学生 17 名）と非対面（on-line オンデマンド）クラス（10 名；日本人学生３名・留学生７名）があり、いずれも日本人学生と留学生の混在クラスである。

b．アンケートについて

対面授業の導入部で、受講者に向けて、本日の授業のテーマへの動機づけとして「やさしい日本語とは、どのような日本語か？」という簡単な記述式アンケートを行った。延べ記述数は、107 件（複数回答可）であった。以下、主な回答例および傾向を示す。

留学生による主な回答は、「簡単な日本語」「わかりやすい日本語」「理解しやすいことば」「漢字が少ない文章」「毎日の生活に使うことば」「相手に通じることば」「日常会話」等であり、回答の全てが、やさしい（易しい）日本語に関するものであった。

一方、日本人学生による主な回答は、やさしい（易しい）日本語より、やさしい（優しい）日本語に関するものが多く見られた。やさしい（易しい）日本語に関するものは、「簡単な日本語」「短い文章」「誰にでもわかりやすい日本語」「理解しやすい文法」等であり、やさしい（優しい）日本語に関するものは、「思いやりのある言葉」「相手の気持ちを考えた言葉」「丁寧な日本語」「きれいな言葉づかい」「やわらかい言葉」「肯定的な言葉」等が多数見られた。「感謝の言葉」「お礼の言葉」「あいさつの言葉」等も多数見られた。「ありがとう」「大丈夫」等の具体的なことばを挙げている人も多く見られた。

「方言」という回答があったが、「方言」は、日本人にとっては、時と場合によっては、やさしい（優しい）日本語となるかもしれないが、外国人にとっては、やさしくない（易しくない）日本語と言えるだろう。

「敬語を使った日本語」という回答が多数見られたが、これは、本論文のⅡ．でも述べたように、やさしい日本語では、「です／ます」の丁寧体は用いるが、敬語は用いないことになっているので、日本人学生にとっては、敬語を使って、丁寧な日本語で話すことは、やさしい日本語になると思われるが、外国人にとっては、敬語は難しいので、やさしい日本語にはならない。この度のアンケートによって、このことが明らかになったので、今後は、日本人学生には、この点に関して、より教授が必要かと考えられる。

ｃ．レスポンの回答について

対面および非対面（on-line オンデマンド）クラスともにレスポン（respon）にて、本日の課題「問：観光における『やさしい日本語』とは何か、その作り方と使い方について、400 字程度で述べてください。」の解答および提出を行うこととした。問いに対する答えの内容、字数ともに、適確な解答が多く見られ、真面目な受講態度が窺われた。

このような授業の組み立て、授業の実際を基に、次章では、考察を行う。

Ⅵ．考察

本考察では、主に、「観光学へのいざない」の授業におけるやさしい日本語について述べる。

授業の組み立てに関しては、本研究の目的である、観光学へのいざないの科目において、日本語教育の立場から、何を教授することができるのか、また、何を教授すべきなのかについて考えることができ、実際に、授業の組み立ての中に、これらを組み込むことができ、かつ、授業の実践も行えた。

授業の実際に関しては、授業の実践を通して、主に、アンケートの実施から見えたことにつ

いて考察する。上述の通り、やさしい日本語に対するとらえ方が、留学生と日本人学生では異なっており、留学生は、やさしい日本語を、主に、やさしい（易しい）日本語と、とらえていたのに対して、日本人学生は、やさしい（優しい）日本語と、とらえている者が多くいた。中でも全く異なっていたのが、敬語に関するとらえ方であった。日本人学生には、やさしい日本語とは、敬語を使った日本語という回答が多く見られたが、留学生には、この回答は全くなかった。もちろん、上述の通り、やさしい日本語では、敬語は用いないことになっている。

日本人学生と留学生が混在するクラスにおいて、日本語教育の立場、視点から授業を行う際は、特に、異なる視点からの物事のとらえ方について、日本人学生に対して、より教授が必要であると考える。

やさしい日本語にするには、先述の通り、やさしい語彙を使う、和語を使う、カタカナ語は避ける、敬語は使わない、「です／ます」を使う、単文を使う、やさしい文法を使う、はっきり言う、最後まで言う、短く言う等々が考えられるが、これらを実践するのは、日本語母語話者の日本人学生にとってもなかなか困難であると思われる。吉開[15]は、実際に外国人とコミュニケーションをとるときに、やさしい日本語が話せるように、単文にしてやさしい日本語にする等の練習問題を作成している。やさしい日本語の作り方や使い方の教授をするだけではなく、これらを用いて、より実践的に学ぶのも一つの方策と言えよう。

このような考察を基に、次章では、まとめを行う。

Ⅶ. おわりに

本研究では、やさしい日本語の誕生の経緯を初め、やさしい日本語の誕生に関する先行研究を行い、やさしい日本語とはどのような日本語か、やさしい日本語を話すコツについて、何を話すか、どう話すか、３つの「～ない」テクニックとは、やさしい日本語の補助ツール等について考え、そして、観光におけるやさしい日本語について、観光現場で日本語を使う意味、外国人旅行者のためのやさしい日本語環境について考え、さらに、観光におけるやさしい日本語の使い方について、外国人旅行者とはどのような人たちか、外国人旅行者と何を話すのか、コミュニケーションの点火等について考え、最後に、「観光学へのいざない」の授業におけるやさしい日本語について、授業の組み立てを行い、授業の実際について考察を行った。

今後の課題は、「観光学へのいざない」の授業において、日本語教育すなわち外国語としての日本語を学んでいない日本人学生にも、よりやさしい日本語の作り方や使い方等がわかるような実践問題等も取り入れた講義展開をしていく必要があると考える。また、授業の結論部において、本日の課題に加えて、特に、日本人学生が、本授業の受講によって、新たな視点、異なる視点を得られたか等の質問、アンケートの実施も行う必要があると思われる。

これらによって、観光学へのいざない科目において、日本語教育の立場からの教授が、より深

まっていくと考えられる。

引用文献、注

１）庵功雄：「第２章〈やさしい日本語〉の誕生」,『やさしい日本語―多文化共生社会へ―』岩波新書 1617（2016） 23-64.

２）松田陽子・前田理佳子・佐藤和之：「災害時の外国人に対する情報提供のための日本語表現とその有効性に関する試論」,『日本語科学』７（2000） 145-159.

３）本学の１年前期開講の「教養特講Ⅰ（観光学へのいざない）」において、観光学が専門の５名の教員と日本語教育、教養教育、英語教育の各教員によるオムニバス形式である。日本語教育、教養教育、英語教育の各教員は、全 15 回の授業のうち、それぞれ各１回を担当とする。

４）岩田一成：「第１部第２章『やさしい日本語』の歴史」，庵功雄・イヨンスク・森篤嗣編,『「やさしい日本語」は何を目指すか―多文化共生社会を実現するために―』ココ出版（2013） 15-30.

５）法務省出入国在留管理庁による令和３年 10 月 15 日の報道発表資料による。

６）岩田一成：「言語サービスにおける英語志向―「生活のための日本語：全国調査」結果と広島の事例から―」『社会言語科学』13, No. 1（2010） 81-94.

７）荒川洋平：「第Ⅰ部２章『やさしい日本語』って何だろう？」，加藤好崇編,『「やさしい日本語」で観光客を迎えよう―インバウンドの新しい風―』大修館書店（2019） 14-30.

８）加藤好崇：「第Ⅰ部１章『やさしい日本語』で話してみよう」，加藤好崇編,『「やさしい日本語」で観光客を迎えよう―インバウンドの新しい風―』大修館書店（2019） ２-13.

９）国際交流基金『海外の日本語教育の現状 2018 年度日本語教育機関調査より』による。

10）日本政府観光局（JNTO）報道発表資料の訪日外客数（2019 年 12 月および年間推計値）による。

11）加藤好崇：「第Ⅰ部３章観光における『やさしい日本語』の使い方」，加藤好崇編,『「やさしい日本語」で観光客を迎えよう―インバウンドの新しい風―』大修館書店（2019） 31-57.

12）国土交通省観光庁『訪日外国人の消費動向　訪日外国人消費動向調査結果及び分析　2019 年年次報告書』による。

13）各教員によるオムニバス形式の授業であるため、担当回の授業の最初にそれぞれ教員が自分の専門分野の紹介を兼ねて自己紹介をすることになっている。

14）本学における各講義の出欠およびアンケート（課題等）を管理できるシステム。

15）吉開章：「第７章練習してみよう」,『入門・やさしい日本語―外国人と日本語で話そう―』アスク出版（2020） 113-141.